

語頭濁音の「候」

—— 洞門抄物を資料として ——

来 田 隆

序

「にさふらふ」の変化形とされる語頭濁音の「候」は、「松浦之能」の「サンザフラウ」がその早い例としてよく知られている。湯沢幸吉郎博士、富倉徳次郎博士によつて、「謡曲」⁽¹⁾、「平家物語」⁽²⁾に於ける用例が取り上げられており、吾郷寅之進博士は、これらに加えて「幸若舞」、「狂言」、「落葉集」と、広く用例を調査され、その用法について考察されている。⁽³⁾「狂言」については、林田明氏のご指摘もある。しかし、抄物に於ける用法については、これまで殆んど取り上げられていず、洞門抄物に於いて、個別的にその用例が指摘されているに過ぎないのである。

洞門抄物は、現在知られているものの多くは、江戸初期に成立・刊行されたものであるが、周知のように、この種の抄物の中には、「候」をソウ・走の形で多用するものが多い。そして、それらの中に、語頭濁音の「候」も少なからず見出されるのである。本稿は、この洞門抄物に於ける語頭濁音の「候」を取り上げ、その用法について考察するものである。

一、洞門抄物に於ける「候」の語形と用法

本稿で取り上げた洞門抄物は、次に掲げる三十二点である。

- ① 報恩録（文明六（一四七四）年写 駒沢大学図書館蔵）⁽⁴⁾
 - ② 碧巖録抄(a)（大宰抄 上卷延宝九（一四九七）年写、下卷文亀元（一五〇〇）年写 淨牧院蔵）
 - ③ 人天眼目抄（川僧抄 江戸初・中期写 東大史料編纂所蔵）
 - ④ 古今全抄（永祿十九（一五六八）年写 京都大学教養部国文研究室蔵）
- 本書は未調査であるが、その「候」の用法について、外山映次氏の報告されたデータを拝借する。⁽⁵⁾

- ⑤ 無門関抄(a)（才応抄 天文元（一五三三）頃講 松ヶ岡文庫蔵）
- ⑥ 碧巖録抄(b)（雷沢抄 天文二（一五三二）年講 室町写 西福寺蔵）
- ⑦ 碧巖代語(c)（才応抄 弘治元（一五五五）年成 転写本 長興寺蔵）
- ⑧ 無門関抄(b)（天文二十四（一五五五）写 吉川泰雄氏蔵）
- ⑨ 無尽集（大谷大学図書館蔵）

- ⑩ 洞水逆流 (写 松平公益会蔵)
- ⑪ 叱淵録 (「信州西蓮寺榮心祖翁和尚之下語」「敲門集」) 江戸初期写 (同右蔵)
- ⑫ 無門関抄(C) (春夕抄 寛永十(一六三三)年刊)
- ⑬ 大中寺本参 (天南松薫 寛永十二(一六三五)編 自筆本 大中寺蔵)
- ⑭ 竜洲抄暮 (寛永十五(一六三八)年写 広島大学国文研究室蔵)
- ⑮ 四部録抄 (正保二(一六四五)年刊 駒沢大学図書館蔵)
- ⑯ 江湖風月略註抄 (寛永十(一六三三)年刊 広島大学国文研究室蔵)
- ⑰ 大慧普覚禅師書抄 (寛永十一(一六三四)年刊 同右蔵)
- ⑱ 無門関抄(C) (寛永十四(一六三七)年刊)
- ⑲ 真歇和尚拈古抄 (寛永十九(一六四二)年刊)
- 本書には「候」の用例が存しないが、参考として掲げる。
- ⑳ 禅林類聚撮要抄 (寛永十九(一六四二)年刊 土井洋一氏蔵)
- ㉑ 大智禅師偈頌抄 (承応三(一六五四)年刊)
- ㉒ 永平元禅師語録抄 (明暦三(一六五七)年刊 駒沢大学図書館蔵)
- ㉓ 大測代抄 (慶安二(一六四九)年刊 同右蔵)
- ㉔ 巨海代抄 (承応二(一六五三)年刊 同右蔵)
- ㉕ 扶桑再吟 (承応三(一六五四)年刊 同右蔵)
- ㉖ 火堯和尚再吟 (万治二(一六五九)年写 同右蔵)
- ㉗ 高国代抄 (万治四(一六六一)年刊 同右蔵)

- ㉘ 勝国和尚再吟 (万治年間(一六六一)刊 土井洋一氏蔵)
- ㉙ 碧巖再吟(d) (明暦三(一六七一)年刊 駒沢大学図書館蔵)
- ㉚ 鉄外和尚代抄 (刊 同右蔵)
- ㉛ 鉄外和尚再吟 (刊 同右蔵)
- ㉜ 無門関抄(d) (鎮寄快牛 写 同右蔵)
- さて、はじめに、これらの抄物に用いられているすべての「候」について、実例は省略し、抄物毎の用例数を活用表にまとめると、次のようになる(この際、本動詞と補助動詞の区別はせず、表記は原文のままとする。ゴチック体は、語頭濁音の「候」である)。
- 文献 未然 連用 終止・連体 已然 命令
- | | | | | |
|---|--------------|-----------------------------------|---------------------|--------------------------------|
| ① | 走 3 | 走 1440 | ／ | ／ |
| ② | サウ 30
走 1 | ソウ 17
サウ 128
ソウ 171
走 17 | ／ | ／ |
| | | 宗 1
ザウ 2
ソウ 3 | ／ | サウエ 1 |
| ③ | ソウ 7 | サウ 4
ソウ 31
ソウ 4 | 候 6
サウ 1
ソウ 1 | ／ |
| ④ | ソウ 10 | ソウ 5
ソウ 32 | ／ | ソウエ 9
ソウエ 1 |
| ⑤ | 走 13 | 走 742 | ／ | 走エ 8
走エ 2 |
| ⑥ | ソウ 2
走 7 | ソウ 2
ソウ 3
ソウ 1347
走 365 | ／ | ソウヘ 2
ソウヘ 3
走ヘ 5
走ヘ 2 |
| ⑦ | ソウ 35 | ソウ 1095
宗 8
ソウ 11 | ／ | ソウヘ 27
ソウヘ 18 |
| ⑧ | ／ | 走 7 | ／ | ／ |

②7	②6	②5	②4	②3	②2	②1	②0	①9	①8	①7	①6	①5	①4	①3	①2	①1	①0	①
走28	走11	走6	走ハ・ワ 走6	走ハ・ワ 走14	ソロ8	/	/	/	/	ソロ4	/	/	ソロ66 ソロ16	走20 ソウワ 1	走1	走1 ソウ1	走1	走22
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
走115	走93	ソウ13 走121	ソウ1 走37	走458	ソロ26	ソロ7	ソロ3	/	ソロ6	ソロ6 ソフロ 候1	ソロ2	ソロ1	ソウ347	ソウ2 ソロ13 走2	走181 ソロ2	走31	走9	ソウ5 走53
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	走へ エ213
走エ3	走エ2	/	走エ1	走エ1	/	/	/	/	/	/	ソロへ1	/	走へ1	/	走エ2	走エ1	/	走エ1

②8	②9	③0	③1	③2	③3	③4	③5	③6	③7	③8	③9	④0	④1	④2	④3	④4	④5	④6	④7	④8	④9	⑤0	
走19	ソロハ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1	ソロ1
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
走77 ソロ3 ソウ1	走23 ソロ25	走395	走160	走5 ソロ1	走5	走3	走5	走3	走5	走3	走5	走3	走5	走3	走5	走3	走5	走3	走5	走3	走5	走3	走5
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
走へ1	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/

(注) ※は活用形不明であるが、今ここに入れておく。なお、右の用例数は、その多くが一回の調査に基づくものである。斜線は用例の存しないことを示す。

語頭濁音の「候」についての詳細は次節以下に譲り、本節では、右表によって、「候」の用法・語形について概観しておきたい。

用法上、室町期成立、江戸初期成立のものを通して認められる傾向は、終止・連体形に用例が集中し、未然形がこれに次ぎ、命令形はわずかであって、連用形は全く用いられないということである。偏りが見られるのは已然形であって、この用法が存するのは④古今全抄、⑤無門関抄(a)、⑥碧巖録抄(b)、⑦碧巖代語(c)、⑧無尺集で、いずれも室町期成立の抄物に於いてである。

ちなみに、右の已然形は、その殆んどが係助詞コソの結びであるが、中に係結びに係わりの無い、已然形終止法が存する。次の2例がそれである。

○誰ムサ〜テ置タソ時一ケノ鉄櫛子テソウへ(碧巖(b)一61才)

○コレ即虎頭虎尾一時収_レ収_メテ(ハ)ソウヘ(碧巖②下6オ)

(一)は別筆の補入
かかる已然形終止法は、⑤古今全抄にも4例存する。
語形については、ソウ(走・宍)が広く用いられる形であり、室

町期成立の抄物ではこの形のみであるのに対して、⑩無門関抄④以下、江戸初期成立の抄物にはソロも見られる。③人天眼目抄にソロが1例存するが、これは江戸初・中期の転写本であり、転写の過程で混入したかと思われる。江戸初期成立のものも、④ソウ(走)専用、②ソウ(走)とソロ混用、⑥ソロ専用と種々であるが、②型の中では、④竜洲抄卷、⑤碧巖再吟④の二書はソロの使用率が高く、注目される資料である。⑥型に属するのは、⑮四部録抄、⑯江湖風月略註抄、⑰大慧普覚禪師書抄、⑱無門関抄④、⑳禅林類聚撮要抄、㉑大智禪師偈頌抄、㉒永平元禪師語録抄であって、これらはすべて万安英種の抄と伝えられる抄物である(ただし、同じく万安抄とされる⑲真歇拈古抄には「候」の用例が無い)。

ソロウは⑩と⑳勝国和尚再吟に各1例見られるのみであり、後者では語頭濁音の「候」であり、前者の場合は、

○則箇ハ辞ノ終也无字義別抄ニ則箇ハ郷談也日本ノ候ト云心ナリ
看ソフロフズト云心也(二31ウ)

のように、訓釈の文脈に於て現われるものである。洞門抄物に於ては特異な形である。

二、語頭濁音の「候」の用例

語頭濁音の「候」の用例を次下に掲げるにあたって、はじめに、

その認定方法について述べておかねばならない。

⑥碧巖録抄②を例にとれば、まず、

○仏語心ヲ爲_レ宗佛語_レコソ心宗ソウヨ(二12ウ)

○只没巴鼻ノ活句ゾウヨ(二25ウ)

のような例は、語頭濁音の「候」たることがあからさまであるが、濁点の付されていない場合であっても、その用法が右例に同じく、体言に直接承接して述語を構成する要素となっているもの、例えば、

○室内一盞トハ灯外ノ一灯ソウヨ(二30オ)

○家寶トハ塵末_レ茶花未開以前の夏ソウヨ(二37ウ)

○未后句ト云ハ野狐之本形ソウヨ(六5オ)

○家山ニ到得ハ奇特神變ソウヨ(七11ウ)

○此當頭ソウヨ(八6オ)

のようなソウも語頭濁音の「候」と認めた。これに準じて、漢字で走表記されている場合であっても、その用法が右に同じである次のようなものは、語頭濁音の「候」として、取り上げた。

○文臺ヲ蹋却ノ云_レ怎麼會三十棒此々走ヨ(二29オ)

○盛行者他ト同參他トハ真ノ道人走ヨ(五12ウ)

○俱胝省力処トハ只一指頭ノ禪單傳ノ心印走ヨ(二40オ)

かくて本書に於いては、ゾウ表記3例、ソウ表記13例、走表記3例の、あわせて19例の語頭濁音の「候」の用例が指摘される。

次下には、資料毎にその用例(抄出)を掲げる。

① 報恩録

○(略)欄_レ裡_レ二細_レダ_レル_レ牛_レコソ老_レ伯_レガ_レ全_レ駄_レ走_レト_レ答_レル_レ也(下11オ)

○破云不_レ知_レ行_レ底_レノ_レ人_レガ_レ驢_レ而_レ知_レ有_レ底_レノ_レ人_レ走_レト(下11オ)

○又云宝處在以此域非實有ガ一生的意ノ見ノ物走ヨ〜(下1オ)

○三四句ハ當毛影ヲ見テ走モ挙又前ニ走モ驚馬走ヨ(上21ウ)

○(略)農夫ノ終日耕テ晚日上リ近クニ急度天ヲ見タ眸走ヨ(下19ウ)

○破云宝劍ハ此心王走ヨ(下44ウ)
すべて走表記で14例存する。

② 碧巖録抄(a) (大空抄)

○唯、自心ザウヨ(上73ウ)

○是非有無ハ皆テ傍觀ザウヨ(上73ウ)

○只タ独歩ゾウヨ(上24オ)

○唯打成一片ゾウヨ(上24ウ)

○只自心ノ現量ゾウヨ(上37オ)

○雷ノ云無縫塔ト云ハ没也界之活処ゾウヨ(上83オ)

○誰レニ付セウニ只人々各々ゾウヨ(上50ウ)

○ザウ2例、サウ1例、ゾウ8例、ソウ3例である。

③ 人天眼目抄

○金門ヲ出ツト作タ心サウヨト御シメテ借位明功(八11オ)

○某答云箇一主人ソウヨト(一20オ)

○思モ依ラス事ソウヨ(八15ウ)

○サウ1例、ゾウ1例、ソウ4例である。

⑤ 無門関抄(a) (才底抄)

○恁麼去ト云タコソ骨髓ニ徹メタ一棒走ヨ(25オ)

○此躍例ノ見処コソ一期ノ間ノ勇走ヨ(52オ)

○頭角四蹄ヲ腕却スルタマチ走ヨ(50オ)

すべて走表記で7例存する。

⑦ 碧巖代語(c)

○向上拈提トイツハ縫罽披離ヲミザル活処ゾウヨ(上18ウ)

○靈骨トハ活法ゾウヨ(下7オ)

○斑石ヲ虎ト見テ正當ゾウヨ(下16ウ)

○此ノ時落國モ啼鳥モ一般ノ行履ゾウヨ(下18オ)

○處コソ了然ノ一句ゾウヨ(上1ウ)

○宗トハ格外之句ゾウヨ(上27ウ)

○曹溪波浪トハ祖師ノ活法ゾウヨ(下53ウ)

○ソウ10例、ゾウ11例のあわせて21例という多数を数える。

⑧ 無尽集

○マゾ此端的走ヨ(78ペ)

○畢竟ワ此ノ無影像底一ノ面目走ヨ(78ペ)

○如此ムゲ目ヲ著ル端的走ヨ(78ペ)

○走表記のみ6例見られる。

⑩ 叱淵録

○釈迦達磨ノ規矩ヲ守ルハ野干走ヨ(35ウ)

○其ノ見地ノ間ガグツトツキテ上歯下歯ノウゲタマレタ瓜牙走ヨ(42オ)

○走表記のみ3例である。

⑫ 無門関抄(c) (春夕抄)

○其ノ佛ハ過去ノ久シイ何ソノ用ニモ立タヌ乾屎橛ゾロヨ(上57ウ)

○亦ノ説ニ此ノ一佛ハ十方諸國ト土ニ現身トミレハ乾屎橛モ佛ゾ

ロヨトナリ (上58オ)

ゾロ2例である。

⑬ 大中寺本参

○肝要ト執着セヌコソ掃地ゾロヨ (8ウ)

○活句ゾロヨ (9オ)

○深イ心地ゾロヨ (27ウ)

○畢竟トハ智不到ノ畢竟テ大功ノ轉處ゾロヨ (27ウ)

○時キ正坐セヌコソゾロヨ (35オ)

○畢竟阿羅漢主人公トハ心ソノゾウヨ (33オ)

○百万辺ヲクツタ夏走ヨ (2オ)

ゾロ13例、ゾウ3例、走2例である。

⑭ 扶桑再吟

○別ニ山マヲモトメ方丈裏ヲカコムハ初心ナ事ゾウヨ (三17ウ)

右1例のみである。

⑮ 勝園和尚再吟

○(略)ト云フハ彼ノ佛ケト云フイナ生類バケ物ノゾウロウヨ

(三91ウ)

ゾウロウ1例で、本稿で調査した洞門抄物で唯一の形である。

⑯ 鉄外和尚代抄(a)

○(略)ト云ハ別伝以心伝心ノゾウヨ (二13ウ)

○時キ直指ノ一法走ヨ (一13ウ)

走表記で3例存する。なお

○天ハ高ク地ハ平カニ月白ク風清ク遂テ走ヨ (一13オ)

は、「マデテ走ヨ」とも解し得るので用例から除外する。

⑯ 鉄外和尚再吟(b)

○其コエ上レト云ハ草鞋ヲ付ヌ足シノゾウヨ (上26ウ)

右1例のみ。

以上の115例の他、④古今全抄の5例を加えると、十五点の洞門抄物に於いて、120例の語頭濁音の「候」が見いだされる。

三、用法とその表現価値

前節で指摘した115例(④古今全抄については用例不明につき、対象から除く)の語頭濁音の「候」について、その用法を見るに、まず、上接語によって分類すると、次のようになる。

- 1 体言 112例
- 2 連体形 2例
- 3 助詞 1例

と、その殆んどが体言に承接する。前節では体言に承接する例のみを掲げたが、連体形承接、助詞承接の例を次に掲げる。

○文他口ノ阿師手ヲ着ケウドスルハ錯リ但手モ付イデ其儘置マズゾウヨ (碧巖(a) 下13オ)

○(略)ト云フ还テ四智ヲ味マズソウヨ (人天 七6ウ)

○善勝ノ驢ノ生テ得ノ儘コソサウヨ (碧巖(a) 下5オ)

ともに、室町期成立の抄物に於いて存する用法である。体言に承接する用法の多いことは、この語の成り立ちからして当然として、その用法上の著しい特色は、終止法以外に用いられることがないことである。すなわち、全てが文末助詞ヨを伴って文末部に用いられているのである。語頭濁音の「候」が専ら終止法として

用いられるということは、この語が、発音を言い収める性質を有するものであることを示している。

この「言い収め」の性質は、この語によって結ばれている文の構造によつても知られる。即ち、語頭濁音の「候」が用いられている文を、その構造から類別すると、次の二種四類に整理される。

I 主語を伴うもの

主語をA、述語の体言(連体形)をBで表わし、修飾語の有無は無視する。以下同じ。

(1) Aハ(トハ・ト云ハ・トイツパ) B「候」ヨ 36例

○是ワ金剛ニモ門外ニモ用処ハ無曾阿吽見聞ク眼走ヨ(報恩 下3ウ)

○和尚云ウ、皆ヲシナルワ第二第三ソウヨ(人天 一8ウ)
○是ワ只物語ノヤウニ道ワテワ感カ説破ニ世莫群已超^コ倫^ヲタル證據ソウヨ(同右 五20オ)

○草ト云ワ無明ノ荒草走ヨ(無門(a) 58ウ)

○老宿云一念トイツハ正念走ヨ(同右 59ウ)

○不^レ機不^レ度底ノ度ト云ハ殺活不^レ渡底ノ活法ソウヨ(碧巖(b) 二18ウ)

○(略)ト云ハ没巴尾ノ活処ソウヨ(同右 二31ウ)

○無辺風月トハ碧岩一百則大意祖師活法ソウヨ(碧巖(c) 上1オ)

○(略)ト云ワ特地新ナ風光走ヨ(無尿 73ペ)

○時キナニ時中身心脱落ト云ハ爰ノソウヨ(大中 32オ)

○(略)ト云ハドツコモ目前ト云ノ心ロソウヨ(同右 9オ)

○(略)ト云ハ佛病祖病ノ^レ走ヨ(鉄外(a) 一15オ)

(2) AガB「候」ヨ 6例

○師云此レカ四大和合ノ時ソウヨ(人天 七20ウ)

○時キガ清白傳家ソロヨ(大中 21オ)

(3) AモB「候」ヨ 5例

○何ニモ一心ソウヨ(碧巖(a) 上32ウ)

○爰モ不^レ轉ノ轉ソノ心持チテ智不到ノ那時ソロヨ(大中 26オ)

(4) AコソB「候」ヨ 21例

○其レコソ其人走ヨ(報恩 上38ウ)

○(略)ト云ハ只問前ノ者ノ欄裡ニ繩タル牛社老僧ガ全駢走ヨ(同右 下11ウ)

○ソコソ^レ那伽大定走ヨ(無門(a) 55ウ)

○草裡深トヲセラレタルコソ難処此子ソウヨ(碧巖(b) 二28オ)

○コノ不知境界コソ身心安居平等ノ性智ソウヨ(碧巖(c) 上4ウ)

○コレコソ智音底ソウヨ(同右 上1ウ)

○欺ヌコソカラソウヨ(同右 上41ウ)

○此境界コソ衲子ノ本位走ヨ(叱淵 49オ)

○至極向上ノ行履コソ氣高イソウヨ(大中 39ウ)

○月船コソ謝三郎ノ心地走ヨ(同右 21オ)

II 主語を伴わないもの

B「候」ヨ 47例

○芍薬花ノ頭自ラノ貌走ヨ(無尿 75ペ)

○某甲カ不^レ知^レソウヨ(碧巖(b) 七11オ)

○若跳^ニ出^セハ五歩外^ニ天下ノ煩ソウヨ(同右 九2ウ)

○只一心ソウヨ(碧巖(a) 上22ウ)

○俱^キ自心サウヨ (同右 上80才)

○只誕生ノ其時ソウヨ (碧巖(b) 二25ウ)

各類の用例数を見るに、I(1)類が多数を占めるのは抄物文として当然であるが、(4)類の係助詞コソの結びに「候」の立つ文が21例を数え、IIの47例中、副詞タダによって強調される文が9例存するのである。更に、次のような例は、一層この語のはたらきをよく示すものである。

○自家トハトコデ有ラウニ自心ソウヨ (碧巖(a) 上26才)

○(略)ドコデ有ラウニ人々ノ自己^方○寸ソウヨ (同右上 44ウ)

○抄云不去不來底人ハ何ント粉ン此人走ヨ (報恩 下13ウ)

○ナニヲ罔テ爲^レ人シタン此直指ノ活法ソウヨ (碧巖(b) 一59才)

のように、自問自答形式の文の末部に用いられ、

○コソソウヨ波間ノ白鷗ト眼ヲ等シタ人ハ (碧巖(c) 上4ウ)

のように、いわゆる倒置法形式の文に用いられているのである。殊に最後の例などは、強く念を押しつけて發言を言い収めるという性質をよく示すものであろう。

洞門抄物の語頭濁音の「候」には、すべて文末助詞ヨを下接する

のも、右に述べたような性質がこの語にあればこそ、念を押し、強く訴えかける文末助詞ヨが自然に付加されたと解される。語頭濁音の「候」以外の「候」でヨを下接語とするものは、その終止・連体形

2586 例中、わずかに13例(5%)に過ぎないのであって、語頭濁音の「候」とヨとの結びつきの強さは明白であらう。

ところで、前述の吾郷博士は、「平家物語(流布本)」、「幸若舞」、「謡曲」その他の中世文献から、語頭濁音の「候」の多くの用例

(97例)を示されたが、今、博士の紹介された用例と、洞門抄物の用例とについて、若干の比較を試みておきたい。

整理すると、次表のようになる。

[上接語]		[下接語]	
1 体言	平 13	2 計	25
2 連体形	幸 30	3 無し	2
3 助詞	誦 2	4 副詞	1
	誦 8	5 無し	3
	その他 2	6 ヤ	1
	計 53	7 ハ	7
		8 マデ	1
		9 ト	3
		10 ヤ	6
		11 ハ	1
		12 マデ	7
		13 ト	8
		14 ヤ	7
		15 ハ	1
		16 マデ	9
		17 ト	3
		18 ヤ	6
		19 ハ	7
		20 マデ	1
		21 ト	3
		22 ヤ	6
		23 ハ	7
		24 マデ	1
		25 ト	3
		26 ヤ	6
		27 ハ	7
		28 マデ	1
		29 ト	3
		30 ヤ	6
		31 ハ	7
		32 マデ	1
		33 ト	3
		34 ヤ	6
		35 ハ	7
		36 マデ	1
		37 ト	3
		38 ヤ	6
		39 ハ	7
		40 マデ	1
		41 ト	3
		42 ヤ	6
		43 ハ	7
		44 マデ	1
		45 ト	3
		46 ヤ	6
		47 ハ	7
		48 マデ	1
		49 ト	3
		50 ヤ	6
		51 ハ	7
		52 マデ	1
		53 ト	3
		54 ヤ	6
		55 ハ	7
		56 マデ	1
		57 ト	3
		58 ヤ	6
		59 ハ	7
		60 マデ	1
		61 ト	3
		62 ヤ	6
		63 ハ	7
		64 マデ	1
		65 ト	3
		66 ヤ	6
		67 ハ	7
		68 マデ	1
		69 ト	3
		70 ヤ	6
		71 ハ	7
		72 マデ	1
		73 ト	3
		74 ヤ	6
		75 ハ	7
		76 マデ	1
		77 ト	3
		78 ヤ	6
		79 ハ	7
		80 マデ	1
		81 ト	3
		82 ヤ	6
		83 ハ	7
		84 マデ	1
		85 ト	3
		86 ヤ	6
		87 ハ	7
		88 マデ	1
		89 ト	3
		90 ヤ	6
		91 ハ	7
		92 マデ	1
		93 ト	3
		94 ヤ	6
		95 ハ	7
		96 マデ	1
		97 ト	3
		98 ヤ	6
		99 ハ	7
		100 マデ	1
		101 ト	3
		102 ヤ	6
		103 ハ	7
		104 マデ	1
		105 ト	3
		106 ヤ	6
		107 ハ	7
		108 マデ	1
		109 ト	3
		110 ヤ	6
		111 ハ	7
		112 マデ	1
		113 ト	3
		114 ヤ	6
		115 ハ	7
		116 マデ	1
		117 ト	3
		118 ヤ	6
		119 ハ	7
		120 マデ	1
		121 ト	3
		122 ヤ	6
		123 ハ	7
		124 マデ	1
		125 ト	3
		126 ヤ	6
		127 ハ	7
		128 マデ	1
		129 ト	3
		130 ヤ	6
		131 ハ	7
		132 マデ	1
		133 ト	3
		134 ヤ	6
		135 ハ	7
		136 マデ	1
		137 ト	3
		138 ヤ	6
		139 ハ	7
		140 マデ	1
		141 ト	3
		142 ヤ	6
		143 ハ	7
		144 マデ	1
		145 ト	3
		146 ヤ	6
		147 ハ	7
		148 マデ	1
		149 ト	3
		150 ヤ	6
		151 ハ	7
		152 マデ	1
		153 ト	3
		154 ヤ	6
		155 ハ	7
		156 マデ	1
		157 ト	3
		158 ヤ	6
		159 ハ	7
		160 マデ	1
		161 ト	3
		162 ヤ	6
		163 ハ	7
		164 マデ	1
		165 ト	3
		166 ヤ	6
		167 ハ	7
		168 マデ	1
		169 ト	3
		170 ヤ	6
		171 ハ	7
		172 マデ	1
		173 ト	3
		174 ヤ	6
		175 ハ	7
		176 マデ	1
		177 ト	3
		178 ヤ	6
		179 ハ	7
		180 マデ	1
		181 ト	3
		182 ヤ	6
		183 ハ	7
		184 マデ	1
		185 ト	3
		186 ヤ	6
		187 ハ	7
		188 マデ	1
		189 ト	3
		190 ヤ	6
		191 ハ	7
		192 マデ	1
		193 ト	3
		194 ヤ	6
		195 ハ	7
		196 マデ	1
		197 ト	3
		198 ヤ	6
		199 ハ	7
		200 マデ	1

ナ	3	3
ヨ	7	2
計	25	39
	31	2
		97

博士は、用例を掲げるに際して「平家物語」では若干例を、「謡曲」では相当数を省略された由である。したがって、右の数値は、それぞれの文献に於ける全例では必しもないにしても、下接語から見ると、その無いものが多く、文末助詞ヨを伴うものが少ないという点では、洞門抄物と相違が見られる。しかし、注目すべきは、これらの文献に於いても、語頭濁音の「候」は、すべて終止法として文末に立つ（上接語のない場合を含めて）用法のみであるということである。このことは、林田明氏の示された「狂言」の例でも同じである。

上接語に関しても「幸若舞」や「謡曲」では、洞門抄物よりも用法が広く、助詞に承接するものが少なからず存する。次例のように、文末助詞ヤに承接する例すら存する。

○あゝらうれしやさむらふ（幸 屋島軍）

○あら何ともなや候（謡 芦刈 船弁慶）

このような用法について、湯沢幸吉郎博士は「や」で終って感動の意を強める」と説かれたが、これに対し、吾郷寅之進博士は語頭濁音の「候」の用法を、すべて上に或る語が省略されたものと解され、右のような用法も、これが感動を表わすのは、「あゝらうれしや（と存じ）候」の「と存じ」の如き語の省略があり、その省略のためではないかと説かれている。しかし、この語の用法・意味を知る上で

重要なことは、既に述べたことを繰り返すならば、語頭濁音の「候」には、これまで見てきた文献では終止法以外の用法は存しないことである。ここから直ちに結論を導き出すことはさし控えねばならないが、そもそも語頭濁音の「候」は、終止法以外の用例は見いださ難いのではないかと思われる。もし然らば、この語はその成立時から文末助詞的性格を有していたものと考えられよう。そして、右の文末助詞ヤに承接するが如きは、その文末助詞的性格を最も強めたものと解されるのである。

洞門抄物の語頭濁音の「候」は、他の中世文献、殊に、「幸若舞」や「謡曲」に見られるものと比較すると、その用法の狭さが指摘できるのであるが、これは、時代差のみならず、「語り物」と「注釈文」という両者の文体の相違に基づくものである。

以上、洞門抄物に於ける語頭濁音の「候」の用法について考察してきたが、なお、その語形について付言するに、⑩無門関抄⑪にゾロ（2例）、⑫大中寺木参にゾロ（10例）、⑬勝国和尚再吟にゾウロウ（1例）が見られる。⑩では、語頭濁音の「候」のみがゾロで、他は走表記である。この2例のゾロは、いずれも高僧のことばを直接語法として引用する箇所で見られているものである。しかし⑬のゾロは講者が受講者に直接語りかける文（かかる文では走を多用）であって⑩とは同列には扱えない。

既に述べたように、洞門抄物に於いて、ゾロは江戸初期成立のものに現われる形である。関西系抄物に於ける「候」の語形・用法について、大塚光信氏は、ゾロは室町後期のものに見られるようになることを指摘され、この形は、サウ・ソウの短縮化によって、新大

にその本源形たるサウラウが顧みられ、それから再生産されたものと説かれて⁽¹³⁾いる。洞門抄物に於いても、サウ・ソウからソロへと變遷する点で、関西系抄物の場合と軌を一にしているのであって、ソロの語性に関しては、両抄物に於いて大差ないものと考えられる。したがって、⁽¹⁴⁾に於けるゾロは、確述すべき事柄を念を押して、強く訴えかけようとする改まりの表現態度が、この語形を選ばせたものと解することができよう。⁽¹⁵⁾に於いて、走を広く用い（ソロも少数用いる）ながら、語頭濁音の「候」の場合のみゾウロウの形となつているのも、これと同様に解し得るものである。

結

本稿から派生する課題を挙げて、結びとしたい。

語頭濁音の「候」は、洞門抄物に於いては室町期成立の抄物には広く見いだされるが、江戸初期成立のものでは限られた抄物にしか用いられない。その少数の抄物のうち、⁽¹⁶⁾大中寺本參、⁽¹⁷⁾扶桑再吟、⁽¹⁸⁾鉄外和尚代抄、⁽¹⁹⁾同再吟は大中寺快庵派下の抄であることが注意される。江戸初期に於けるこの語の勢力を知るには、これらの抄物に見られる他の言語事象と関連づけての考察が必要であろう。

語頭濁音の「候」は、認定上の困難さがあってか、これまで見過されることがあったのではないかと思われる。関西系抄物についての調査が当面必要であるが、更に溯つて調査を進めれば、これまで指摘されていない用例が他の文献にも存するかと思われる。この話の消長については、考えるべき問題が多いのである。

注

- (1) 「謡曲の「候」」(能楽研究)第3巻 昭和17・11)
- (2) 「平家物語の解釈文法」(時代別作品別解釈文法) 昭和37)
- (3) 「近古に於ける語頭濁音の「候ふ」」(文学) 昭和31・5)
- (4) 「候ふ」とその異形群」(近代語研究)第1集 昭和40・9)
- (5) 本稿で用いた資料は、⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾は「禅門抄物叢刊」複製本、⁽¹³⁾は「抄物大系」複製本、⁽¹⁴⁾は「松ヶ岡文庫蔵禪籍抄物集」複製本、⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾は「洞門抄物と国語研究」(資料篇)、⁽¹⁹⁾は「統曹洞宗全書」注解三」の翻刻、⁽²⁰⁾⁽²¹⁾は「抄物少系」、⁽²²⁾は土井洋一氏「勝国和尚再吟」致し原文篇(口白)、「(学習院大学文学部研究年報) (15・16・17 昭和43・44・45) に依る。⁽²³⁾⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾⁽²⁶⁾⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾は原本調査。
- (6) 「古今全抄とその用語」(近代語研究)第5集 昭和52・3)
- (7) 注(6) 論文。
- (8) 「宗」表記は、谷大甲木古今全抄(注6 外山論文)、人天眼目才応抄(金田弘氏「問答体のカナ抄物—中世国語資料としての「密参録」」「門参」(国学院大学紀要)13 昭和50・3)の例が指摘されているが、⁽²⁹⁾⁽³⁰⁾にも存する。
- (9) なお、次のゾウは誤写かと疑われるので語頭濁音の例から除外した。

○只心一行カ劔デソソ(下32ウ)

○ (略) 何支モ多子無デソウソ (上27ウ)

○重テ何ガ露ソウズ (下60オ)

(10) 注 (4) 林田論文。

(11) 注 (3) 論文所引。

(12) 「抄物小系」2 「丁丑版無門関抄」はしがき。

(13) 「抄物とその助動詞三つ」(「国語国文」昭和41・5)、「詩学大成抄のことば」(同 昭和43・9)

(14) 注 (13) 論文(後者)に、

○禽獸モ夷秋モ人スヨ (日本書紀抄(古活本)上15ウ)

のような「候」の用例が掲げられているが、このような「候」と語頭濁音の「候」との関連も明らかにされねばならないであらう。

△追記▽ 本稿は、第三回鎌倉時代語研究会夏期研究発表会(昭和53年8月12日 於広島大学)に於いて口頭発表したものをもとに纏めたものである。

口頭発表の際に御示教を賜わった小林芳規先生、山内洋一郎氏、及び貴重な凶書の閲覧をご許可下さった関係所蔵者各位に厚く御礼申し上げます。

(福岡教育大学助教授)